

# ひらがなを数えなおす

## ひらがなは何文字あるのか

岡田一祐 おかだ かずひろ / AA研特任研究員

図4 嵯峨版『伊勢物語』(1608年刊、国会図書館蔵)巻一13丁裏。2字下げされているところは、有名な「かきつばた」の歌で、教科書で習うことも多いだろう(なお、17世紀当時、濁点も義務ではなかった)。

明治以前のひらがなはいまとちがって無数にも思えるさまざまなかたちが通用していました。ひらがなはいったい何文字あったのか、そもそもそんな無数のものごとのように向き合ったらよいのか考えてゆきます。

文字は、人間がことばを載せるためにつくった道具です。これはつまり、文字を研究するには、ひととことばとの係わりのなかに文字を見いださねばならないということです。文字は、輪郭を認識する能力や、手を自在に動かす能力などの、ひとがすでに持っていた能力を、ことばを書きあらわす目的に活かすかたちで生まれたものです。逆

に見れば、輪郭として認識できないものや、無理をしないと書けないような線からは文字は成立しませんし、声に出してみることもすらないものも文字ではありません。これをいいかえれば、文字は「からだとことば」から制約を受けているということです。わたしの関心は、その制約のなかで、ひとがどのように文字を使ってきたかということにあります。

とりわけわたしが研究しているひらがなと呼ばれる文字の歴史は、「からだとことば」との関係という点から見てきわめて興味深い事例を提供するものと考えています。いまあるひらがなは、9世紀に誕生して以来、千年あまりを経ていまあるすがたになったもので、生まれたときは、いまのようなすがたではかならずしもありませんでした。「からだとことば」にかかわる問題のひとつとして、その昔のすがたの「ひらがな」には何文字あるのかという問題があります。

ひらがなは漢字で日本語を書きあらわすなかで生まれた文字です。漢字がやってくるまえには日本語を書きあらわせる文字はありませんでした。中華文明圏、ひとによっては漢字文化圏とも呼ぶ、その域内に日本が組み込まれてゆくにつれ、中国のことばを書きあらわす漢字も日本にやってくるようになりました。そして、中国語を読む必要から、その文字に立ちむかうなかで、日本語は文字によって書きあらわす手段(表記)を獲得することとなりました。日本語学者の犬飼隆氏のことばを借りれば、それは、「漢字を飼い慣ら」し、日本語に合うように「銕なおす」過程だったことでしょう(『漢字を飼い慣らす』人文書館、2008)。

その初期の段階の表記は、万葉集でよく知られることから、万葉仮名と呼ばれています。これは漢字の音訓を転用して、音が同じ日本語の表記に用いるものです(もともとの漢字の用法の範囲を出ないので、仮借ともいいます)。たとえばアと読む漢字であれば、日本語のアを読むのに宛ててしまおうということです。傾向はあってもその宛て方には決まりはなく、万葉集のなかでアキということばは、「阿伎」とも「安吉」とも書かれています。

かなは、このような初期の段階からの「銕なおし」の産物ということが出来ます。かなにはひらがなとカタカナがあります。カタカナは漢字の一部分を取ってできたものです。それに対して、ひ



図1 江戸時代のかな字典『和翰名苑』の字体をデータベース化したもの(<http://kana.aa-ken.jp/wakan/>)。これは「い」から「は」の部だが、どれがどのかなだろうか？

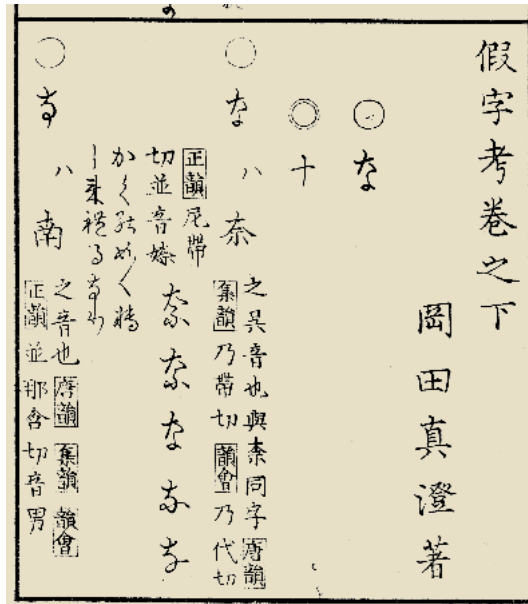


図2 江戸時代のかな研究書『仮字考』(北海道大学附属図書館蔵)より。「奈」から「な」まで崩れていったその下に、「かくのごとく転じ来れるなり」とある。

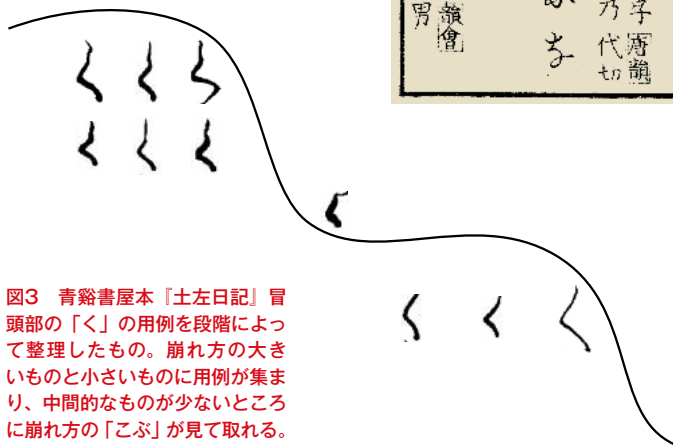
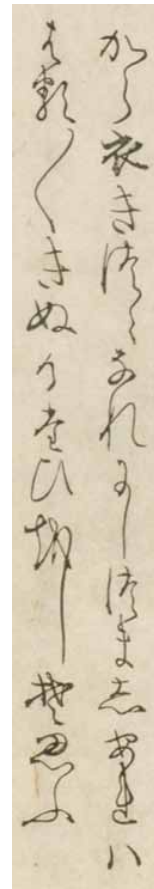


図3 青谿書屋本『土左日記』冒頭部の「く」の用例を段階によって整理したもの。崩れ方の大きいものと小さいものに用例が集まり、中間的なものが少ないところに崩れ方の「こぶ」が見て取れる。



図5 図4の和歌を記すひらがなをいまの漢字に直せば、「加良(衣)幾徒々奈礼余之徒末志安連八者類>>幾奴留堂比越之楚(思)不」(なお、画像内太字および括弧内( )は漢字)となり、「から衣きつぎなれにしましあれははる>>きぬるたひをしそ思ふ」と読む。「堂」で「た」と読むのは、古代の音読みは「だう」という音に近かったからだ。



## 加良衣幾徒々奈礼余之徒末志安連八者類 く幾奴留堂比越之楚思不

らがなは、カタカナとときと場を近くして生まれたものなのですが、漢字の全体を略してゆく行書体や草書体というものを鑄なおして、日本語を書く目的に飼い慣らしていくことで成立したものです。それゆえ、鑄なおされたかなにも、漢字を使って日本語を表記していた初期の段階の痕跡が残っていて、ひらがなにあつては、それは「同じ音だからといって同じ文字を使うとは限らない」というものでした。この痕跡は、1900年前後にひらがなが整理されていまの47字になるまで残っていました。

さらにひらがなが複雑なのは、漢字の崩した書き方である行草体を出発点にしているという点です。行草体は、偏旁などの部分を一筆に省略する書き方で、どの部分がどのていど省略されるかによって、同祖異形字が多種発生します。また、省略された部分をさらに省略することもあり得るので、事情はさらに複雑です。さらに、ひらがなとして成立したあとも、さらに省略したり、変形したりすることもあるので(図1)。こんなことで、ひらがなを数えることはできるのでしょうか。

### 「ひらがなは何文字あるのか」という問いはいかなる問いだろうか

そもそも、これはどのような問いなのでしょう。この問いは、ひらがなが数えられるものであり、また、数えられるものである前提がなければなりません。これまでの研究では、とくに前者に対して否定的でした。そのいいぶんはこうです。「ひらがなは、漢字を崩したものなので、崩し方の程度で無限のバリエーションができるため、数えることは原理上できない。また、もとなる漢字はあるていど共通するが、どんな漢字もひらがなと

して使えるので、数を究極的には限定できない」。

この意見は、まったく根拠のない説だとはいえませんが、あまりに完璧主義的で、極端すぎるものではないかと考えています。これまでの多くの研究では、「字母」と呼ばれるものを中心にひらがなを捉えています。字母というのは、図2に示すように、あるひらがなのもととなった漢字のことです。しかし、図2では字母は楷書体で示されています。さきほど、ひらがなは行草体を出発点としているといったことを踏まえれば、楷書体から崩れていったかなができたように説くのは、いささか奇妙ではないでしょうか。図2の著者は、楷書体の漢字からならだかになができていく図は歴史を示すものではなく、「模式図」だとは断っていますが、だんだんと、そのような方便ではなくて、本当の歴史のように思えてきたということではないでしょうか。

さきにも述べたように、行草体は、漢字の構成要素を一筆にまとめてしまうもので、ゲレンデの斜面のようにならだかに崩れていくというよりは、モーグルの「こぶ」のように、でこぼこ崩れてゆくと見るほうが的確です。図3は、そのような「こぶ」の例です。たしかに中間的な例もあるにはあるものの、そのようなものは少ないことが見て取れます。こうして見ると、なめらかな変化を想定して、数え上げられないとしてきた既存の研究はひらがなの実態に合わないといえます。

そもそも、字母でひらがなを数えることには、「からだとことば」の観点欠けています。これは、昔のひとびとが字母でひらがなを認識し、かつ、ならだかな変化を認識できていたという理論的含意を持ってしまふわけですが、光の周波数の遷移にすら色のちがいで段階を見いだすひとが、

そのような無段階に変化するものに段階を見いだすことなく扱えるとも思えません。また、字母を同じくする同祖異形字であっても使い分けしている例があったり、ひとくくりには同音字といっても、字によって対応する音が変わったりするのを見るに、ひとの認識能力やことばとの対応関係から、つねにひらがなを捉えなおすことが必要なのです。

### ひらがなの字数のさきに

そのようなわけで、現時点では、ひらがなが具体的に何字あったのか確定できていません。しかし、ひらがなを数えるという試みは、なにをひらがなの一字一字と考え、なにをひらがなの中心と考えるかというモデル、それによって幾様にも数えられてゆくべきものであり、幾度も数えなおされるべきものであると考えています。

この試みは、さらには、「からだとことば」の臨界に迫るものです。世界にはいろいろな文字がありますが、ひらがなのように複数の文字が複雑にことばを載せている例はあまりありません。そういう意味で、ひらがなの研究は、ひとが文字を扱うことの限界を探る試みへと発展してゆくものなのです。